

探訪 新ライフスタイル

昭和の観光地の大型旅館は、施設内で完結できるような「消費圏い型」が主流だった。しかし、ネット社会になり、地域の人が楽しむ場所やコトが拡散され、旅行者との垣根が取り外されてシームレス化が進んできた。平成になると、民泊サイトのエアビーアンドビーにより、若い世代や日本を個人で訪れる外国人、FIT(Foreign Independent Tour)を中心に民泊スタイルが定着し、最

ライフスタイル

「まちやど」が観光地を元気に



静岡県熱海市のまちやど「ゲストハウスマルヤ」

熱海の街、リノベで個性発掘

近では、まち全体を一つの宿と見立てた宿の仕組みである「まちやど」が、日本の観光スタイルを変えつつある。

まちやどは宿泊施設と地

域の日常をネットワークさせ、まちぐるみで宿泊客を温浴施設との補完共生で街全体の魅力や価値を高めるのが特徴だ。リピーターとなり、街との継続的な

リノベーションした小規模な施設が多く、地域の飲食店や温浴施設との補完共生で街全体の魅力や価値を高めるのが特徴だ。リピーターとなり、街との継続的な

関係を重視するのが、従来の宿やホテル、民泊とは大きく異なる。

代表例が静岡県熱海市だ。最盛時に720軒あった旅館・ホテルは一時313軒まで落ち込み、人口も5万4000人から3万7000人に激減、多くの空き家、空き店舗が点在していた。宿泊客数も1973年の518万人をピークに減少を続け、2011年は247万人まで落ち込んだが、昨年度は302万人まで回復した。

関係を重視するのが、従来の宿やホテル、民泊とは大きく異なる。

代表例が静岡県熱海市だ。最盛時に720軒あった旅館・ホテルは一時313軒まで落ち込み、人口も5万4000人から3万7000人に激減、多くの空き家、空き店舗が点在していた。宿泊客数も1973年の518万人をピークに減少を続け、2011年は247万人まで落ち込んだが、昨年度は302万人まで回復した。

関係を重視するのが、従来の宿やホテル、民泊とは大きく異なる。

代表例が静岡県熱海市だ。最盛時に720軒あった旅館・ホテルは一時313軒まで落ち込み、人口も5万4000人から3万7000人に激減、多くの空き家、空き店舗が点在していた。宿泊客数も1973年の518万人をピークに減少を続け、2011年は247万人まで落ち込んだが、昨年度は302万人まで回復した。

新生熱海は、眠っていた温泉や街の飲食店を紹介し、暮らす旅を提案。たった21室だが4年間で1万9522人の宿泊実績を上げた。昨年末には倉庫となっていた2階、3階をまちやどにした「ホテル ロマンス座カド」が開業した。隣が休館した映画館だったため、この店名を命名し、マルヤのフロントと連動した一体運営をスタートした。

旧態依然としたサービスを提供していた観光宿泊業には大きな可能性がある。社会全体に閉塞感が充満する中、まちやどを介した人との交流はリフレッシュの栄養素になり、個性的な飲食店や物販店を見つけた。しみは旅の大きな目的になった。まちやどのように時代の流れや雰囲気を読むことに長じ、生活者が喜ぶライフスタイルを生み出すのは永遠のテーマでもある。

(商い創造研究所代表 松本大地)